

川游『日本医学史』と読むか、「官戸と(官)婢」(服部敏良『奈良時代医学史の研究』)と読むか、二通りあることを著者より教示された。律令制下で官戸、そして(官奴)婢は更に官戸の下に置かれた賤民の一つであり、官戸の婢では意味をなさなくなる。最近は後者が定説のようである(日本史大事典)。

以上余分なことにまで立ち入り、不遜に亘った点をお詫びしたい。

本書は「縄文時代から現代までの一貫した通史」としてよくまとめられた、まさにこの著者により、出るべくして出た好著である。

(石原 力)

〔集英社、東京都千代田区二ツ橋二一五—一〇、電話〇三—三二三〇—六三九三、平成十四年四月二日、新書判、二三七頁、定価本体七二〇円〕

杉本つとむ 著

『江戸の阿蘭陀流医師』

二十一世紀を迎えて、オランダ語を学ぶ人の数はどのくらい居られるか。またその中の医師の数は、となると微々たるものであろうと考える。日頃、オランダ語に悩まされている医師の一人として、杉本つとむ先生の著作は『解体新書の

時代』の他に何があったかと思うことがある。と申すのも筆者は杉本先生を語学の先生と理解しているからである。

『解体新書の時代』の中に、「甲寅来貢西客対話」を紹介しておられるが、当時の蘭学者が甲比丹一行に会いに、宿舎の長崎屋へ出向くための許可手続きが載せられ、解説されて読者は初めてその複雑さに驚くのである。この手続きはオランダ学にとって些細な一事であるが、これが入口となつて語学、医薬の技術、西洋医学の思想が展開していくのであるから、当然新著の『江戸の阿蘭陀流医師』にこの「対話」が載っていると思つたが、残念なことにカットされたようである。これはちょっと気掛りな点に思えた。

本書は、客観的に、実証的に、万人に納得できる〈近代日本医学〉の源流の真の姿を描きたいと、次の課題について長崎、江戸、京阪、東京への流れを追っている。以下、目次よりひろつてみる。

序説——翻訳と実証

I、大槻玄沢とその医学思想

一、大槻玄沢と『重訂解体新書』

二、『瘍医新書』と西洋医学思想

II、東西の〈本草学〉と〈薬学・医学〉

一、本草学と薬学

二、化学と医学

III、日本近代医学の源流

一、長崎通詞とオランダ医学の導入

- 二、江戸の蘭方医と医学書の翻訳
 - 三、蘭方医と医療器具と西洋医学
 - 四、近代医学のあけぼの
 - 五、来日の蘭医と近代医学
- IV、〈解剖〉への挑戦

- 一、西洋解剖学と解剖書
- 二、オランダの名医、W・テン・ライネの来日
- 三、最古の翻訳『人体解剖図譜』
- 四、解剖と京都医学会
- 五、解剖と京都の先進性
- 六、漢・蘭医師と京都実証派と解剖
- 七、京都蘭学と解剖の饗宴

附、解剖史略年表

阿蘭陀流医師の系譜

英文抄録

外国人人名索引

総索引 など

これだけ多くの事項に論及しようとすると、何処かに濃淡が出そうに思い、例をオランダ好みのはしりであった老中、稲葉美濃守正則を索引で調べ本文を読んだ。この殿様の強い要請でオランダの名医W・テン・ライネが来日したこと(二二―三六頁)、この殿様はライネからJ・レメリン著の『小宇宙鑑』——人体解剖図譜ともいう——をプレゼントされたらしいこと(二二五頁)が記されている。

ここまでは多くの方々知られたことであるが、ライネに関連して、通詞との問答集『阿蘭陀薬方雜聚』や、『長崎先民伝』の紹介がなされており、十七世紀の医術の実態にふれつつ、レメリンの解剖図譜の翻訳本『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』をめぐる論争に言及しており、貴重な記事だと思ふ。筆者の注文をあえて云わせていただくと、稲葉美濃守正則という殿様が、引退後居城の小田原をはなれ、息子が越後高田に国がえになった時、この解体図譜はどうなったのか、関連して小田原に蘭字がなぜ発生しなかったのかなども知りたいのである。

稲葉正則があの本を買った(とする説もある)としても、所蔵することで単なる道楽に終わったのか、小田原藩が相続く天災のため財政難が慢性化し、とても新しい学問を支援していく態勢ではなく、あの本自体は行方不明となったのか。これは一地方の問題であると同時に全国的な視野で考えてみる。良い点である。

技術畑の人間は、このような些細な疑問にひっかかっていたら一歩も足が進まないで、無理な注文の一例をのべた。

杉本先生の「まえがき」で「のべられた念願は、問題提起を処々に秘めつつ約四百頁の大作となった。最近では医師国家試験の出身校別成績が公表されるため、医学部での医学史の講義は益々減じている。このようなときに、江戸時代に西洋医学と苦闘した先輩医師の歩みを学ぶことは重要で、杉本つとむ先生のこの本は欠くことの出来ない文献となつ

た。ご購読をおすすめする次第である。

(中西 淳朗)

〔早稲田大学出版部、新宿区戸塚町一―一〇四―二五、電話〇三―三二〇三―一五五一、二〇〇二年五月三十一日、A五判、三八一頁、定価本体八五〇〇円〕

野間 祐輔 著

『二宮敬作と彼をめぐるひとびと』

今回、図らずも広島呉市の野間祐輔先生著『二宮敬作と彼をめぐるひとびと』の書評を求められる栄に浴したのは敬作出身に近い宇和島在住の為かと思っている。

著者は九州大学医学部卒の皮膚泌尿器科で郷里の呉市で医院を開業されていた。

前書きで著者が二宮敬作の名を知ったのは、呉秀三先生の『シーボルト先生(その生涯及び功業)』であると述べておられる。著者のもう一つの出版物『呉家のひとびと』を送られて、呉秀三先生の先祖が愛媛県中島町から呉市に移住したことを知った。

この本より著者は以前より医学史に興味をもたれており、また松山高専学校に学ばれ愛媛とは太い絆でむすばれているのでこのような本が生まれたのではと推察する。

通読すると、二宮敬作の生い立ちから始まり、その時代背

景や巡り会ったひとびとについて、エネルギーシユに資料を収集し、敬作ゆかりの地、保内町や卯之町、宇和島、そして長崎まで足を運び地元からも直接取材を行うなどの努力に全く感服する。敬作に関する著作ではこれ程詳細に記述されたものを知らない。

農民出身の敬作が鎖国された時代に藩主の命でなく、自らの意思で長崎遊学を決心し、苦学しながら蘭方医になった事は驚きである。シーボルトの鳴滝塾で学び、やがてシーボルトの江戸参府に選ばれて同行し富士山の測量を行ったり、學術調査に深く関わった事がシーボルト事件で門人中最も重い刑を受ける事になった。その後故郷に近い卯之町で開業しシーボルト医学の外科を継承した。その間シーボルトの娘イネを養育し日本の女医一号に育て上げた。敬作が関わった人々、シーボルト、その娘イネ、高野長英、村田蔵六、三瀬周三等について多くの資料を駆使し、また三〇枚程度の各地の史跡の写真や地図、系図も収載されており、興味深くよめる。

地元の人からみると、勤勉実直でどちらかというところあまり面白みのない人間ととられていたが、シーボルトと深く関わったが故に著者曰く、ドラマチックで人間愛に満ちた人生を送ることとなったのではと、思う。宇和島について、村田蔵六設計の権崎砲台跡に蔵六を顕彰する碑もなく、市内には敬作やイネの住居跡を示す標識もないとの指摘をうけ、地元の人間にとり恥じ入るばかりである。残念なことに本書は非売品となっている。